2011年(平成23年)2月14日 月曜日 朝刊 三
朝日新聞東京本社
発行所：〒104-8011 東京都中央

ご近所さんに伝えたい

ボタ山がのこる福岡の筑豊地方。その一角に、障害のある人たちが地域活動の拠点としている「虫の家」がある。

2008年、「杉野ハンセン病資料室」の看板が下がった。虫の家を運営する高石伸人(61)が、友人で、熊本の施設に暮らす杉野芳武(79)、桂子(69)夫妻の名をとり、開いたのだ。

杉野たちが隔離された施設で使ってきた、たんす、鍋、釜、竹かご、所持品箱など約200点が並んでいる。

杉野芳武さん（左）、桂子さん夫妻

福岡には、隔離の施設はない。それなのに、なぜハンセン病の資料室なのか。

高石がその訳を教えてくれた。「ご近所さんの間で、この病気への理解が広がらんことには、問題は解決に向かわん」

高石は「無らい県運動」を意識していた。それは、患者をなくしていく、官民あげての運動だ。昭和初期、愛知県から始まり、全国に広がった。患者がいたら保健所や警察に通報し、地域ぐるみでいじめて、その土地に住めなくしたのだ。

高石は言う。「運動を支えてきたのは、隣のおじちゃん、おばちゃんたち。ハンセン病をめぐって何が起きたのか、身近に伝えていかんとね」

私たち、ひとりひとりが加害者になっていたのだ。

杉野夫妻と高石の出会いは、らい予防法が廃止された翌年の1997年だ。高石が施設を見学に行ったのが、きっかけだ。

高石が夫妻の自宅を訪れる。妻の桂子が、湯飲みでお茶を出してくれた。

高石伸人さん

「よかったら、どうぞ」

出されたから、高石はお茶を飲んだ。それだけだった。

だが、場がうちとける。

帰り際、夫の芳武が言った。

「お茶は飲んでくれたんね。私たちには、自分の家の湯飲みで飲んでくれるというのは、ものすごくうれしいとよ」

感染することはまずないのに、それを恐れるあまり、食べ物や飲み物に手をつけない客が、多くいた。

出したものに手をつけてもらえない。施設のなかの人たちは、寂しく思い、考えた。

〈もうお茶を出さないほうがいいかしら〉

〈ペットボトルのほうがいいのかな〉

夫妻も、気を使ってきた。

高石は、福祉の現場に身を置いてきた。だが、この病への知識は、無に等しい。俳優加藤嘉がハンセン病の父親役で、息子とともに白装束姿で海岸線をさすらう、あの映画「砂の器」のイメージしかなかった。

虫賀宗博さん

いまはどうなのか。もっと話を聴いてみたい。

全国の施設に向かう。隔離が目的だけに、島やへき地にある。どこへ行くのも、手間ひまかかった。例えば、新幹線と鈍行列車、さらにバスとタクシーを乗り継ぎ、瀬戸内の島へ。証言を聞かせてもらう人は、杉野に紹介してもらう。青森から沖縄まで、全国13カ所を訪ねた。

高石は、杉野夫妻に言った。「地域で伝えたい。杉野さんの名を貸してもらえませんか」

夫妻は応じた。「治療の場なのに、一生をおくる生活の場だったことを知ってもらえたら」

こうして、小さな町の小さな集落に小さな資料室ができた。3年間で約300人が訪れた。

京都市にも、語り継いでいる場がある。虫賀宗博(55)が主宰する寺子屋式の勉強会だ。

90年。虫賀は、詩人の島田等と講演会の席で知り合った。島田は、岡山にある隔離の島に住んでいた。

ハンセン病の隔離政策を、島田は「病棄て」と表す。病んだ人間の居場所を奪い、見えないところに棄てきた。それも終身刑で、と断じていた。

虫賀は、島田の元へ通いだす。すると、どっこい、たくましく生きている人たちが、そこにいた。

失明したから点字の楽譜を舌で読み、ハーモニカ楽団をつくった近藤宏一。

予防法が廃止される前に本当の名前を明かした、語り部の先駆者だった伊奈教勝。

みんな光っていた。虫賀は心を打たれた。「病棄てをする社会は、私たちの無関心が支えている。どんなに理不尽に居場所をなくしても、人は強いんだ。それを、おれはコツコツと伝え続けるよ」

（高木智子）